

[038] 中国文学論集表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/16520>

出版情報：中国文学論集. 38, 2009-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

編集後記

前号編集後記にも書きましたが、本二〇〇九年は九州大学、そして九州大学文学部にとって大きな節目の年です。本学に「法文学部」が設置されたのは大正十三年（一九二四）、今年は一八五周年となります。また法文学部が改組され新たに「文学部」が創設されたのは昭和二十四年（一九四九）。今年は「還暦」たる六〇周年です。そして、まさに今年、学部一二年生の「字び舎」は、六本松を離れ、福岡市西郊に造成された「伊都キャンパス」に移りました。新築校舎の最上階からの景色は、古代の「伊都国」の眺望を彷彿とさせるすがすがしい田園風景です。なお当中文研究室は、まだ当分は旧来の箱崎キャンパスにとどまっておりますので、お間違え無きように。

さて、時の移ろいとともに、人も、建ても変化致しますが、我々の学問（中国文学・中国語学）も、それにつれて少しずつ推移するのでしょう。本『中国文学論集』第三十八号所収の十一篇の論文は、本誌の創刊号（昭和四十五年・一九七〇）や、その前身『中国文芸座談会ノート』創刊号（昭和二十六年・一九五一）の頃に比べ、さまざまな点で異なっているようです。まず第一の点は、巻頭の陳正宏先生の講演にも象徴されるように、「版本」に関するきめ細かな検討が、多くの論文の研究の起点にあること。研究室の新進気鋭の諸君は、まことに排空馭氣、各地の図書館を巡歴し、数々の新発見をしてくれています。中には岸田君のように、照顧脚下、わが九州大学の各資料庫から郭沫若関係の貴重な遺品を見つけ出した研究もあります。第二の点は、左思や元稹、そして清代の王貞儀など、これまでの研究が必ずしも十分ではない作家についての研究が見られること。しかしこれは決して「マイナーな詩人」を意図的に選んだのではない。六朝、唐宋、そして清代の文学思潮を、より客観的に、科学的に把握するために、敢えてその時代において「難解」とされ、敬遠されてきた長大な作品群に挑んだ労作だと思えます。最後に第三の点は「日本」です。中国文化をより広い視野をもって考察するためには、時には日本に残る資料も重要な研究テーマへの端緒となるのです。これらの点は、平成二〇年代の頃の私たちの研究姿勢として後世にも堂々と胸を張って主張できるのではないのでしょうか。もちろん、十数年後には私たちを更に凌駕する優れた研究成果が現れるはずですが。

（静永記）